

2017 年度大学院進捗報告会

2017 年 3 月 16 日(金)・17 日(土)

図書館ホール

(1 日目) 3 月 16 日(金) 14 : 30~16 : 40

(2 日目) 3 月 17 日(土) 10 : 00~16 : 10

■発表形式

- ・発表者、1人20分(発表12分、質疑応答8分)の発表で行います。

第1鈴6分、第2鈴8分、第3鈴12分の3回ベルが鳴ります。

■参加について

- ・2017年度進捗状況報告会は誰でも参加可能です。事前連絡は必要ありません。参加される方には、会場でお名前と所属のご記名をお願いいたします。

■発表内容の口外禁止のお願い

- ・本発表には、共同研究のものや、今後予定されている調査・実験の内容が含まれているものがあります。発表の詳細が分かるような内容の口外はお控えください(SNS等も含みます)。

■学部生の今後の調査・実験の参加について

- ・学部生(特に、総合心理科学科の学生)は、本発表に関する調査や実験の対象者になる可能性があります。進捗報告会に参加された学部生の方は、今後、発表者の調査・実験の参加にできない可能性があることをご了承ください。

■図書館ホールの利用について

・ホール内は飲食禁止となっております。会場を出てすぐのエントランスに飲み物とお菓子を
用意しております。ご自由にご飲食ください。

発表スケジュール

3/16 (金) 14:30~16:40

14:30~14:50 椎木泰華 M2 米山ゼミ

知的能力障害児及び自閉スペクトラム症児における従事行動に対する介入研究

応用行動分析の中で、課題従事を標的行動とした研究は、数多くなされてきた。従事行動を促す方法として、課題の難易度や試行数の変更、既学習課題挿入手続き、トークン・エコノミー法等、多数挙げられる。しかしながら、文脈、弁別刺激、反応、結果への介入のうち、どれが有効かという視点で、それらを比較検討した研究は見られない。そこで、知的・発達障害児を対象に、従事行動を標的行動とした介入研究を実施し、効果の検討を行う。

14:50~15:10 道野栞 D1 佐藤 (暢)ゼミ

前後情報を付加した環境内での空間記憶統合

視点切り替えにより、観察者から見た観察対象の向きが入れ替わると、その周囲にある物体位置の記憶成績が低下する。この記憶成績の低下は、観察対象の前後情報（前後軸）が参照軸となることを示唆する。本研究では、前後情報を付加した環境における参照軸を検討した。刺激として円柱型の物体を用い、床のテクスチャを一定方向に動かすことで円柱型の物体に前方向を付加した。視点切り替えにより、被験者から見た床のテクスチャの進行方向が入れ替わる映像を観察させた場合に、物体位置の記憶成績が低下した。本研究より、物体位

置の記憶を統合する際には、特定の物体の前後軸が参照軸として機能する場合があることが示唆された。

15:10～15:30 栗林千聡 D2 佐藤(寛)ゼミ

ジュニア選手の競技不安に対する認知行動療法

ジュニア選手の代表的な心理的問題の一つに競技不安が挙げられる。過度な競技不安は生活上のストレスや怪我のリスクを高めるなど、ジュニア選手の競技生活に不利益をもたらすことが知られている(Smith et al., 2000)。ジュニア選手の競技不安はその後の競技生活に対してネガティブな影響を与える危険性があることから、有効な予防的対策が必要な喫緊の課題であるといえる。しかしながら、ジュニア選手の競技不安に対する現場で応用可能な知見は極めて不足している。そこで、ジュニア選手の競技場面における認知を測定する尺度を作成し、競技不安に対する認知行動療法プログラムを開発した。

15:40～16:00 高山博司 M1 小川ゼミ

不正行為の誘発における情動過程と個人特性の役割について

人々の善悪の道徳的判断およびそこから生起する行動には、情動過程と推論・思考過程との両方が影響していると言われている。特に、嫌悪感情は我々の道徳的認知に特異的な影響を与えていることが示唆されてきた (Pizarro et al, 2011)。これまでの研究では、嫌悪感情は道徳的な判断を厳しくすることが示されている。今回の発表では、不正行為の生起頻度に嫌悪情動が与える影響およびその影響と個人差との関連について検討した研究を報告する。

16:00～16:20 植田瑞穂 D3 桂田ゼミ

他者の達成に対する 2 歳児の共感的反応と関連する要因

他者の達成に対する幼児の共感的反応の発達に関わる要因として、子ども自身の達成経験や達成時における被称賛経験の効果を検討した。2 歳児を対象に、子ども自身の達成時に称賛を与えられる群と与えられない群を設定し、母親の達成時における子どもの反応の変化を検討した。また、実験者や母親の達成時における子どもの反応と、自由遊び時に子どもが玩具で達成を経験する回数や母親が称賛する割合との関連を検討した。

16:20～16:40 金山裕望 D1 佐藤(寛)ゼミ

自閉スペクトラム症を抱える児童の対人相互作用への支援の開発

自閉スペクトラム症 (ASD) とは対人相互作用場面において困難を抱えることを主訴とする障害であり、児童期から支援を実施していくことが求められる。そこで研究 1 と研究 2、研究 3 においては ASD を抱える児童 (ASD 児) を対象とした調査および行動観察を行う予定である。研究 4 においては ASD 児を対象とした支援法の展望を行う。研究 5 においては学校場面における支援を行う予定である。

3/17 (土) 10:00~16:100

10:00~10:20 白井理沙子 D1 小川ゼミ

視線手がかりの有効性と標的の情動価が人物の信頼性判断に及ぼす影響

人物の視線移動の知覚は視覚的注意を自動的に誘導するだけでなく、視線の送り手の印象形成にも影響を与える。例えば、標的位置を予測する視線手がかりを与える人物は信頼性が高いと評価される。本研究の目的は、視線手がかり課題を用い、視線手がかりによる人物の信頼性評価への影響が、標的の情動価によってどのように変化するかを明らかにすることであった。実験の結果、画像位置と一致した方向に視線を移動させる顔は信頼性が高いと判断され、この効果は不快画像より快画像で大きくなった。この結果は、標的画像の情動情報が視線知覚を介して人物の信頼性判断に影響することを示している。

10:20~10:40 伏田幸平 D3 片山ゼミ

異性の身体的魅力はそれが課題無関連情報でも注意を惹きつける

本研究は 3 刺激 oddball パラダイムを用いてヒトと家画像を呈示し、課題無関連情報としての身体的魅力が注意をひくか ERP を指標として検討した。ヒト画像は高/低魅力画像各 30 枚から構成され、低/高頻度のいずれかで呈示した。ヒト画像として異性もしくは同性を呈示する条件を設けた。異性の高魅力画像は低魅力画像より大きな P3 を惹起したが、同性刺激では魅力による差は認められなかった。よって異性の身体的魅力は注意を惹きつける重要な情報であることが示された。

10:40～11:00 水崎優希 D1 佐藤(寛)ゼミ

養育者のマインドフルネスが養育者の精神的健康と子供の適応に与える効果

養育者が精神的に健康であることは、子供の適応にとって重要である (Kahn et al., 2004)。マインドフルネスとは、「意図的に、今この瞬間に、価値判断をすることなく注意を向けること」(Kabat-Zinn, 1994) と定義される、ストレス対処方略として注目されている概念である。養育者のマインドフルネス傾向を高める介入は、養育者の精神的健康や (Whittingham, 2014)、親子関係にも寄与することが示唆されている (Coatsworth et al., 2015)。博士論文では、養育者のマインドフルネスが親子に与える効果について明らかにする。

11:10～11:30 辻本江美 D1 小野ゼミ

大学生の抑うつ状態に対する対人関係カウンセリングの長期的効果の検討

大学生の抑うつ状態に対する対人関係カウンセリング (Interpersonal counseling : IPC) の長期的な効果について検討した。IPC 群と通常のカウンセリング (counseling as usual : CAU) 群の比較対照試験完了後、探索的フォローアップ研究を行った。カウンセリング前、カウンセリング後、カウンセリング終了 4 週後、8 週後、12 週後の 5 時点において、抑うつ状態を評価した。大学生の抑うつ状態に対して IPC および CAU は長期的効果を認めなかった。今後対象者数を増やし、軽度の抑うつ気分を測定する方法を工夫する必要があると考えた。

11:30～11:50 小國龍治 D2 大竹ゼミ

エピソードシミュレーションが効力感に及ぼす影響—向社会性の観点から—

本研究は、援助行動の想像及び想起が援助効力感と援助動機に及ぼす影響を検討した。また、援助効力感が援助行動の想像の鮮明さと援助動機の関連を媒介しているかについて検討した。その結果、援助行動の想像は、援助効力感と援助動機を高めることが示された。一方で、援助行動の想起は、それらに影響を及ぼさなかった。また、援助効力感は、援助行動の想像の鮮明さと援助動機の関連を媒介していることが示唆された。

11:50～12:10 竹谷怜子 研究員 小野ゼミ

教員の QOL とメンタルヘルスについて

教員のメンタルヘルスの低下が危惧され、教員の Quality of life (QOL) の低下が推察される。そこで、教員の QOL について、その現状と自殺への考え方の現状との関連、注意欠如多動性障害 (ADHD) の知識と対応方法との関連を探索的に調査するため、小・中・高等学校教員を対象に 3 つの研究を行った。その結果、教員の役割/社会的 QOL が低い可能性が示唆され、教員の自殺への正しい理解には役割/社会的 QOL の向上が必要である可能性が考えられた。

13:30～13:50 中村早希 D2 三浦ゼミ

複数源泉から複数方向の説得場面における態度変容プロセスの解明 2

説得の 2 過程モデルは、被説得者の態度変容プロセスを説明する主要な理論である。しか

し、このモデルに基づく研究の多くは、単一源泉・単一方向の説得状況を用いており、現実場面で頻繁にみられる複数の源泉から複数方向に説得する状況が考慮されていない。本発表では、複数源泉・複数方向の説得状況においても、その基盤的な部分に説得の2過程モデルが適用可能かについて、被説得者の動機づけを操作して検証した実験を紹介する。

13:50～14:10 金喬 D1 米山ゼミ

中国語版ペアレント・トレーニングプログラムの開発と日本との比較

近年、中国では障害児教育が注目され始めたものの、まだ大半の障害児が家庭で訓練を受けるのみである。そのため、家庭で科学的な療育が実施できるように、保護者向けのプログラムを推進することが急務だと考えられる。発表者は日本国内ですでに有効性が報告されている肥前方式ペアレント・トレーニングとその入門編であるペアレント・プログラムを中国語版に訳し、中国国籍の保護者に対して実施を行い、効果を比較していく予定となる。

14:10～14:30 山岸厚仁 研究員 佐藤(暢)ゼミ

ラットの援助行動における前部帯状皮質の役割についての検討

困難に陥った他者を助ける行為は援助行動と呼ばれ、社会生活を円滑に営む上で重要な役割を果たしている。本研究では、ラットを被験体として、痛みの共感に関与する前部帯状皮質や、社会行動の調整に関わるオキシトシン受容体が援助行動に果たす役割について検討してきた。本報告会では、前部帯状皮質の神経細胞活性と援助行動の関係および、前部帯状皮質のオキシトシン受容体の阻害が援助行動に及ぼす影響について報告する。

14:40～15:00 大塚拓朗 研究員 片山ゼミ

隠匿情報検査における隠蔽に関連する心的過程の検討

隠匿情報検査は、特定の事件事実に対する弁別的反応の有無をもとに、検査対象者が事件に対して認識を有しているか推定することを目的としている。弁別的反応の生起機序は定位反応(Sokolov, 1963)の枠組みで説明される一方、メタ分析では隠蔽に関連する心的過程が弁別的反応を修飾している可能性が示唆されている。博士論文は、その修飾様式を実験研究で明らかにし、既存の理論を精緻化することを目的としている。発表ではこれまでに行った実験を概観する予定をしている。

。

15:00～15:20 渡邊佳奈 M1 米山ゼミ

自閉スペクトラム症児に対する社会的相互交渉の獲得に向けた交代遊びの指導の検討に関する研究計画

社会的相互交渉とは他者の行動を弁別刺激とするような他者との関わりややりとりのことであり、人間が社会の中で生活し、発達していくためには必要不可欠なものである。しかしながら自閉症スペクトラム児は自ら他者との相互交渉を開始すること自体があまりなく、相互交渉を実行する経験が制限され、その結果相互交渉が十分に展開できない場合がある。そこで相互交渉を行うための下位行動である交互交代行動に注目し、交代遊びを行う機会を設定してその指導について検討する研究計画を発表する予定である。

15:20～15:40 藤山 北斗 M1 佐藤 (暢)ゼミ

概念的、記号的な見方が模写の正確性に及ぼす影響

斎藤 (2014) は、より写實的に模写を行うには、例えば 2 本の縦線を線路に見立てるような、概念的で記号的な見方を抑制し、より 2 次元的布置として描く対象を捉えることが必要ではないかと主張している。しかし実験的に検討された例は少ない。そのため、1 つの完成された絵を 6 段階に分け、模写をする前に見本の絵を見せる条件と見せない条件を設定することで、何を描いているか分からない場合と分かる場合に分けた。2 つの条件で模写された絵の正確性の比較を検討した。

15:50～16:10 石井主税 D1 片山ゼミ

行動結果の評価は刺激価との組み合わせで変容する

ある刺激は経験を通して刺激価 (良い / 悪い) を獲得する。ギャンブル課題中の結果の良し悪し (Gain / Loss) と刺激価との組み合わせから、一致条件 (例: 怒り顔 / ×“ばつ”が Loss を意味する) と不一致条件 (例: 笑顔 / ○“まる”が Loss を意味する) を設定し、刺激価が結果の評価に及ぼす影響について、事象関連脳電位 (ERP) を指標に検討した。P300 振幅の結果から、刺激価によって行動結果の評価が変容されることを示唆した。